

地域情報（県別）

【青森】多職種23人が連携して肥満症の専門治療、手術や入院も可-藤田征弘・弘前大学医学部附属病院肥満症・栄養治療センター長に聞く◆Vol.2

他科からの紹介増、低栄養の患者もサポート

2025年8月27日 (水)配信 m3.com地域版

2025年5月、弘前大学医学部附属病院（弘前市）に開設された「肥満症・栄養治療センター」では多職種23人が在籍し、肥満症の専門的な治療を行っている。栄養・運動指導と内科治療に加え、外科手術や入院下での減量も実施。低栄養の患者もサポートする。「まだ手探りの段階」と藤田征弘センター長（内分泌代謝内科学講座教授）は話すが、院内での認知度は高まっており、紹介患者が増加。今後は地域に向けて周知していく考えだ。（2025年7月29日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



藤田征弘氏（大学ホームページから引用）

栄養・運動指導と内科治療を並行、必要な場合は手術も

——肥満症・栄養治療センターでは多職種が連携し、肥満症の患者に総合的な治療を行っているといいます。

「センター」と名がついていますが、専用のスペースがあるわけではなく、院内の組織として整備しました。メンバーには、私が診療科長を務める内分泌内科と糖尿病代謝内科、袴田健一院長が教授を務める消化器外科のほか、精神科や栄養管理部、看護部、リハビリテーション科のスタッフ23人が在籍しています。これはあくまでベースとなる人数であり、実際の診療では臨機応変に他の職員が関わる場合もあります。

治療対象となるのは原則、紹介状のある肥満症の患者さんです。減量目標を設定して管理栄養士による栄養指導と理学療法士による運動指導、内科治療を並行して行います。基本的には栄養指導を2カ月に1回以上行って6カ月後に評価し、改善が難しそうな場合は外科手術も検討していきます。センターには日本肥満学会が認定する肥満症生活習慣改善指導士の資格を持つ管理栄養士がいるので、より専門的な指導も可能です。

入院体制も整えています。対象は手術を行う患者さんや減量を目的とした患者さんです。後者について、BMIが45を超える重度の患者さんなどで減量のために食事療法を行う場合、入院下で適切に実施しないと栄養失調などのリスクを伴うことがあります。1日の摂取カロリーを600～800キロカロリーほどに抑える低カロリー食にするような場合です。

——同センターでは低栄養の患者への治療も行っているそうですが、具体的にどんな人が対象になり得るのでしょうか。

慢性膵炎の患者さんや、口腔外科などで手術を行った患者さんなどです。慢性膵炎になると消化酵素の分泌が低下して消化吸収不良が起きたり、食事制限が影響したりして低栄養になるおそれがあります。口腔外科の手術を行った患者さんの場合、術後に食事がとりづらくなり、栄養摂取に悪影響が出る可能性があります。摂食障害などの精神疾患の患者さんも想定しています。

——23人も多職種を配置するのに、苦勞はなかったのでしょうか。

ありがたいことに、人材の調整にはさほど苦勞を要しませんでした。当院ではセンター開設前から肥満外来を運営しており、多職種で連携してきました。外科との連携は先ほど話したように消化器外科が専門の袴田院長に相談して了承を得られましたし、精神科の先生も快諾してくださいました。肥満症の手術を行う際は事前に精神科のコンサルテーションが必要なので、同科の協力も欠かせません。

院内の認知度が高まり、他科からの紹介増

——開設してからまだ2カ月余りですが、運営してみても手応えはいかがでしょう。

まだ症例が多くはなく手探りの段階ですが、院内の認知度は高まってきたと思います。他科から「肥満症の治療をお願いします」と紹介されることが増えてきたためです。例えば、膝関節症などの整形外科疾患を抱える患者さんの場合、減量してから手術を行う方が望ましいことがあります。センターという看板ができたことで、院内の職員には相応のインパクトがあったのではないのでしょうか。

肥満症の患者さんへの手術や術後のカンファレンスも既に行っています。患者さんの中には術後にリバウンドしてしまう人もいるため、看護師や管理栄養士が介入して継続的にサポートしていくことが大切です。なお、開設前には肥満症治療における多職種連携の経験が豊富な東邦大学医療センター佐倉病院（千葉県佐倉市）の先生に相談し、ウェブ上でその様子を見学させていただきました。

次のステップは地域への周知「正しい疾患理解を」

——地域に向けた周知活動も重要になってくるのでしょうか。

そうですね。院内の認知度は高まってきたと思いますが、センターの機能を面で生かしていくには地域の医療従事者や一般の方々に広く知っていただくことが重要です。肥満と肥満症の違いや肥満症の定義、治療方法について知らない医療従事者はまだ多いと思いますし、まして患者さんや一般の方は正しい知識を持っていない方もたくさんいます。肥満症は単に太っているだけではなく、将来的に命に関わる疾患であり、医学的に減量が必要であることを知っていただきたいです。センターの開設は複数のメディアで紹介されたこともあって認知されてきていると思うので、次のステップは疾患について正しく理解していただくこと。地域の勉強会などで医療従事者にお話する機会があればうれしいですね。

——「肥満（症）は治療する時代になってきた」と医師から聞く一方で、日本人は肥満を「自己責任」と捉えがちだと言われます。

肥満（症）であることを個人の努力不足などとするスティグマ（偏見）は患者さんを適切な医療から遠ざけてしまう可能性があります。今はまだ心理的なハードルが高いかもしれませんが、医療は進歩しているので、将来的には糖尿病や高血圧症と同様に、肥満症の治療も抵抗なく行える環境になってほしいと思います。特に青森県は若い人や子どもの肥満も多いので、県の未来を考えた時、このような世代に向けて情報を発信していくことも大切でしょう。何らかのアプローチを検討していきたいです。

1993年滋賀医科大学医学部卒。ブリティッシュコロンビア大学（カナダ）への留学を経て、2007年から2018年まで旭川医科大学内科学講座病態代謝内科学分野の特任助教、助教、学内講師。2018年から2023年まで滋賀医科大学内科学講座糖尿病内分泌・腎臓内科の講師（学内）、講師、准教授、診療教授。2023年10月から弘前大学内分泌代謝内科学講座教授。2025年5月から同大肥満症・栄養治療センターセンター長。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

